

御堂筋のあたり

訪ねた。神道の香りをまとった前川権宮司が迎えてくれた。

明治8(1875)年

に「難波神社」と改められた。仁徳天皇を主祭神とし、配祀のお稲荷さん

まず、由来から伺った。当神社の歴史は古く、西暦406年、現在の松原市上田に反正天皇が父・仁徳天皇を偲んで神社を

は船場商家の「いなり信仰」の中心的役割を果たしたという。本来、「いなり」稲荷はお米の守護

「初午祭」(4月の初午)、(1811)年に、2代夏(氷室祭) (7月21、22日)、秋の「火焚祭」(11月15日)が有名である。顧みると、昔から天皇はまず立派な神社を建て、国の五穀豊穡、国民の安寧を祈って神事を行う。神の御意に沿って、天皇は政(まつりごと)の基盤に村の祭りがあると思われる。神社がその拠点になるのは当然である。散した。

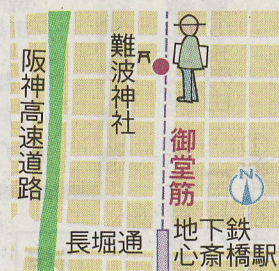
400年以上も見守るクスノキ

建てられた。その後、943年、大江の坂平野郷(現在の天王寺区)に移り、「難波大宮」または「平野神社」と呼ばれ、8丁四方の広さを誇っていた。豊臣秀吉時代の文禄3(1594)年、秀吉の寄進により当地の上難波村に移った。上難波宮または仁徳天皇社と称し、四方鳥居の建立が許された。

り神であったが、産業・商売が発達して商売の守り神に変わり、当社社を「稲荷社」、「博労町いなり」として親しまれてきた。祭りとしては春の

ろう。天皇の政と村の祭りには同音同義語で、ともだ。そんな発展ぶりや世の盛衰を400年以上も見守ってくれているクスノキが大きな木陰を境内に広げていた。大阪市保存樹第1号にふさわしい大樹であるが、どこか孤高に映り、神社ともども貴公子然として、普段着では訪ねにくい雰囲気がか

くなくなった翌年の文化8



戦時中、「日本は神国なり」と言われて教育された世代のわれわれは、戦後の教育や宗教現場で、今日は、御堂筋沿いにある、クスノキの大樹が生い茂った難波神社を